



ち え の わ

Vol. 17

篠笛の話

会員 若林 擴

念願叶って、東京藝術大学音楽学部邦楽科で篠笛を教えて頂くことになりました。何時かは始めようと20年前から篠笛と胡弓は買ってありました。胡弓は幸運にも当代一流の師匠に巡り会いましたが篠笛はなかなか縁がありませんでした。

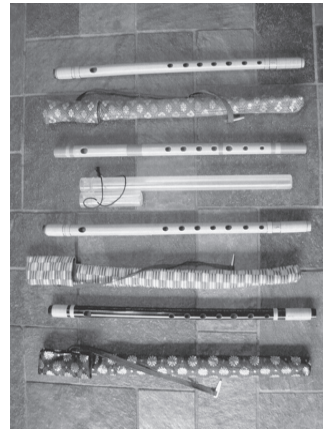
平成13年の秋に弁理士の会のテニス大会でアキレス腱を切りました。片足ではテニスが出来ないので暇を持て余して、平成14年3月に長唄で藝大邦楽専科を受験致しました。試験科目は昔得意だった長唄の名曲「越後獅子」でした。

今は長唄の師匠についていないので、人間国宝芳村伊十郎のCDで勉強し直して受験致しました。受験の際のインタビューで師匠はどなたですか？と聞かれ、人間国宝の故芳村伊十郎のCDですと答えたら試験官は沈黙してしまいました。藝大邦楽専科は伝統芸能の継承者を育てるため、家元の子弟など将来性のある若者を養成するのが目的だそうです。結局年齢で？入学させてくれませんでした。

今回、その藝大で篠笛を教えて頂きました。篠笛の教授は人間国宝 寶山左右衛門が作った福原流篠笛の吹き方教則本に、篠笛の吹き方モデルとして写っていた写真の主でした。ご縁がありました。

篠笛は節の間の長い篠竹（雌竹）で作る約44センチの日本独特の細い竹笛です。その構造からチューニングが出来ない楽器でもあるので、伴奏楽器として長唄のうたい手の声の高さに応じて笛を使い分けるために、プロは常時、半音刻みで1本から12本までの調子の篠笛を用意しなければなりません。

レッスンは吹きやすい7本調子の笛を使用するとかで、折角買って持っていた8本調子の笛は使えずに、取り敢えず初心者用のプラスチックの7本調子の笛を購入しました。写真は上から順番に、買っておいた8本調子の篠竹で笛中に赤漆を塗った篠笛と袋、次は



初心者用の7本調子のプラスチック製の篠笛とプラスチック製の筒、今使っている7本調子の篠竹の篠笛と袋、最後は篠竹の外側を黒漆で塗り、笛の中を赤漆で塗った舞台用の7本調子の篠笛と袋です。

1回目のレッスンでは全く音が出ず、只、歌口の孔に息を吹き込む空気の音だけでした。2回目のレッスンでやっと音が出ました。7つの手孔を左手の指先と右手の指腹で順番に塞ぎ、順番に開く事は何と難しい事でしょう。

3回目のレッスンでやっと音に合わせて指を上げ下げすることが出来るようになり、4回目のレッスンでは「さくらさくら」を曲がりなりに吹けるようになりました。しかし笛を支える親指と、手孔を塞ぎ、開く、左右の手の指に妙に力が入り、力づくで笛と手孔を押さえ込むので親指が攣り、全力で空気を吹き込むので疲労困憊致しました。

5回目のレッスンでプラスチックの笛ではどうしても柔らかい音が出ない事が分かり、結局7本調子の篠竹の篠笛を買いました。6回目のレッスンでもまだ息の取り方が上手く行かず、息が切れて酸欠状態に陥ることが屢々でしたが、どうやら「祇園小唄」「荒城の月」「月の砂漠」を曲がりなりに吹けるようになりました。

7回目のレッスンは藝大生の三味線に合わせて吹くリハーサルを兼ねました。8回目は、レッスンではなく、ミレニアムホールでの本番演奏で、1,000円の入場料を頂く「藝大生のフレッシュコンサート」でした。宝塚の生徒のように紺の袴を付けた可愛らしい藝大生の三味線に合わせて篠笛を独奏させて頂きました。

篠笛を習い始めから、リハーサル、本番の舞台まで、一貫してCATVが取材に来ていましたので、幸運にも2ヶ月間の私の篠笛修得風景が30分番組になりオンエアされました。

この頃になるとどうやら笛を持つ親指も力が抜けて、左右の指も軽く手孔にタッチ出来るようになり、後は本番で唇と指が緊張せずに間違いなく音がでるかどうかです。

緊張すると本番で音が出ない時があります。その時はさり気なく笛を置くことだと教授に教わりましたが、笛が一人の時はそうもいかず、三味線の音について行きながら音が出るところだけ音を出すことにするか、笛だけの独奏は暫くやらない事にするかです。プロでも舞台上で音が出ない時があるそうです。

ピアノや三味線は、叩けば音が出るのに「篠笛」は簡単には音の出ない楽器だったのです。習い始めて音が出るようになり、それが綺麗な音に変わるまで大体2ヶ月掛かりました。最初は意気込んで歌口に強く吹

き込んでいた息が、自然に呼吸するような息に変わり、息を細く吹き込んで音が出るようになる迄は大変でした。

澄んだ音が出るようになると弁慶ほどの豪の者が牛若丸に篠笛で五条の橋の上に誘き寄せられた理由が良く判ります。人は誰でも美しいものに弱いものです。特に男は幾つになっても美しい姿・形、美しい音色を追い求めます。

篠笛はフルートと異なりタンギングをしないのが決まりです。舌先でスタッカートして音を区切らず、一息の間に指先と指腹の手孔の開閉で音を出します。「打ち指」と呼ばれる伝統的な演奏技法が出来るようになると、祭囃子の祭礼音楽に多用される「ピー・ひゃらら」の「ひゃらら」が出せるようになります。

20年前に、その美しさに魅せられてアメリカ HALL 社製のガラスのフルートとピッコロを買いました。どうやっても音が出ず諦めて放ってありました。篠笛が吹けるようになったので、久しぶりに取り出して、試しに吹いてみると、何とガラスのフルートとピッコロの音が出るようになってはいませんか。どうやらガラスのフルートもピッコロも篠笛と同じような構造なので、曲を吹けるようになるのも時間の問題です。

何でもやってみるものです。